柴田南雄の音階分析法を観点とした小学校歌唱共通教材の変遷
－日本的・西洋的を指標として－

木　暮　朋　佳

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第62号抜刷）

美作大学・美作大学短期大学部紀要
2017, Vol. 62. 41～50

論　文

柴田南雄の音階分析法を観点とした小学校歌唱共通教材の変遷
－日本的・西洋的を指標として－

Typically Japanese or Occidental?: Transformation of materials for teaching singing at elementary school from Minao Shibata's analytical perspective

木暮　朋佳[i)†]

要　旨

小学校歌唱共通教材曲を音楽と日本語などの観点から、どれだけ日本の伝統文化と共通点を持つかを研究してきたが、ここでは柴田南雄の音階分析法による時系列を主な関心事項とした学習指導要領の改訂ごとの曲目の変更と全体の変遷の特徴を明らかにした。その結果、４つの改訂による３つの変化は、１回目（昭和33→昭和43）はほとんど同位置、２回目（昭和43→昭和52）は大きく日本的方向へ、３回目（昭和52→平成元～現行）でも日本的な方向へ、動いたと分析できた。

キーワード：小学校歌唱共通教材、柴田南雄、日本的、日本音階、西洋的、指導要領改訂、変遷

１．はじめに

小学校歌唱共通教材曲は西洋的な手法による和声やリズムそして楽器などを使って学習することが一般的であるが、それ以上に能の手組やアシライなどに代表される日本の音楽システムや楽器などを使って伴奏される必要があると考える。それは素朴に日本語による日本の歌だからである。しかし、さらに論理的に音楽と日本語などの観点から、どれだけこれらの曲が日本的であるのか、日本の伝統文化と共通要素を持っているのかを明らかにできれば、その説得力はさらに力を持つと考える。

そこで、本研究では柴田南雄の領域説とともに使われている音階分析法（柴田 1978）を使った音階分析の観点に光を当て、時系列を主な関心事項とし、小学校歌唱共通教材の改訂ごとの曲目の変更と全体の変遷の特徴を把握することで、この命題に迫ることとする。

なお、本稿で使う柴田の分析法は、音階の使用音の頻度数（曲全体で使われる回数）と総音価数（その使用音の全曲にわたる音価の合計）から有力な使用音を割り出し、使用音全体による通常の音階の中に隠されたもう一つの音階を割り出す分析法である。

２．研究の対象

本研究対象の半分以上を占め、比較する際に基準とする現行小学校歌唱共通教材曲[1)]は、文部省唱歌として成立した歌を中心として、わらべうたと平安時代及び江戸時代後期等を源流とする日本の歌で構成されている。その旋律の成立は、文部省唱歌に関しては歌全体がつくられた時に生まれ、楽譜として固定化し音階も確定している。しかし、その他の歌やわらべうたに関しては成立の時期がやや曖昧であり、歌い繋がれる中で旋律までも変化したであろうことは、長唄や謡が個人の装飾音の工夫による歌い方や時間的なズレを許容するシステムの中で伝統をつないできた事実からも容易に想像できる。また、音階に関しても、核音と隣

i）†　美作大学短期大学部幼児教育学科

接音の距離が半音以下～1音程度までを揺らぐことが日本の歌では一般的であり、陽音階と陰音階の間を動いたであろうことは容易に想像がつく。小学校歌唱共通教材曲の「子もり歌」はその代表例である。したがって、わらべうた2曲と「うさぎ」「さくらさくら」「越天楽今様」「子もり歌」は、旋律や音階に流動性があると捉えられる。

昭和52年改訂の小学校歌唱共通教材曲[2)]は平成元年以降の現行の曲目と比べ、「かたつむり」「虫のこえ」「茶つみ」「まきばの朝」「こいのぼり」「越天楽今様」「われは海の子」がなく、「かりがわたる」がある。ここでは、文部省唱歌を中心にわらべうたと江戸時代後期等を源流とする日本の歌で構成されるのは現行と同様であるが、江戸時代より前の日本の歌は含まれていない。よって歌の成立時期やその旋律や音階の流動性に関しても、現行の平成元年以降の改訂と同様と考えられる。尚、改訂の曲数は現行24曲に対し、昭和33年から昭和52年改訂までの総数は18曲と少なくなっている。

昭和43年改訂小学校歌唱共通教材曲[3)]は昭和52年改訂の曲目と比べ、「うみ」「ひらいたひらいた」「夕やけこやけ」「かくれんぼ」「うさぎ」「ふじ山」「とんび」「スキーの歌」「かりがわたる」がなく、その一方で平成元年以降の現行曲目である「かたつむり」「茶つみ」「こいのぼり」「われは海の子」がある。さらに昭和52年改訂以降にはない「つき」「ゆき」「村まつり」「村のかじや」「海」があり、わらべうたがないことが特徴である。文部省唱歌が中心で江戸時代後期等を源流とする日本の歌で構成されることと、歌詞の成立時期に関しては、現行の平成元年以降の改訂と同様である。旋律や音階の流動性に関しては「さくらさくら」「子もり歌」のみにあると考えられる。

昭和33年改訂小学校歌唱共通教材曲[4)]は昭和43年改訂の曲目と比べると「村まつり」「茶つみ」がなく、「汽車」「赤とんぼ」と交代した形である。旋律や音階の流動性に関しては昭和43年改訂と同様である。

なお、昭和33年改訂から現行まで共通する曲目は「日のまる」「春がきた」「春の小川」「さくらさくら」「もみじ」「冬げしき」「おぼろ月夜」「ふるさと」の8曲である。また、現行にない過去の改訂にある曲目は「つき」「ゆき」「汽車」「村まつり」「村のかじや」「海」「かりがわたる」「赤とんぼ」の8曲である。

以上のように、本研究は改訂に伴う曲目の変更による変化を分析対象としている。

なお、この改訂ごとの曲目変更の認識は、次章に示す木暮(2014)に述べたものである。

3．先行研究

日本的・西洋的という指標を設定し、小学校歌唱共通教材曲の歌詞について、現行の小学校歌唱共通教材曲を分析した木暮(2011)と、過去の改訂を含んでその変遷を論じた木暮(2014)がある。前者は、現行の小学校歌唱共通教材曲はすべての曲が日本の伝統的な手法である七五調などの定型詩かその影響を受けた歌詞の構造でできているとしている。この論文では「新たな定型」が多数確認され、六五調2例、八五調2例（これらを「壱ズレ七五調」と総称)、六四調1例、八六調2例（これらは「弐ズレ七五調」と総称）があり、すべて7字の七調が2例、すべて5字の五調が1例(これらを「単字数調」と総称)、さらに最後だけ5字の七調が3例（これは「五留七調」又は七調＋都々逸調と総称・分析）と、七五調に影響を受けたと考えられる13例の新たな定型構造の歌詞を持つ小学校歌唱共通教材が分析・分類されている。後者は前者の上に立ち、過去の改訂にあり現行にない小学校歌唱共通教材曲を分析・分類した上で、時系列として、日本的・伝統的な方向へ動いてきた結果として現行曲が位置づけられると結論し、定型詩構造の影響下にすべての曲が存在するということだけでなく、改訂による変化の中で、より定型度の強いものが多くなったと付け加えている。

本研究に関連する直接的先行研究としては、上例と同じように日本的・西洋的という指標を設定しながらも、その観点を柴田南雄の音階分析法にしている木暮(2009)があげられる。そこでは、現行小学校歌唱共通教材曲は、陽音階、陰音階、四七抜き音階、二四抜き

音階、四抜き音階といった日本音階又はそれに近い音階であるか、「ふじ山」や「冬げしき」などのように長音階でも四七（ファとシ）の使用頻度が少ない四七抜き音階に近いものであることを柴田南雄の音階分析法で明らかにし、すべての現行小学校歌唱共通教材曲は日本音階と西洋音階の折衷であり、純粋な長音階や短音階ではないと結論づけている。

なお、この３つの論文では「定型詩構造」「日本音階」にそれぞれ着目して「日本的・西洋的」を指標として座標をつくり図式化している。本論文は「日本音階」に着目である。

４．研究の目的

通常の音階認識より詳細な柴田南雄の音階分析法を使い、現行以前の改訂による小学校歌唱共通教材も含めたすべての曲目の音階を割り出し、改訂ごとの曲目の変更の特徴とそれを総じた全体の変遷の特徴を、日本的→西洋的という指標による座標から捉えることを目的とする。このことを明らかにするのは、日本の伝統音楽では言うまでもなく日本音階が古くから使われており、小学校歌唱共通教材でもそうした傾向があるならば、それを演奏する場合の伴奏の形態と楽器そして唱法や表現の工夫等をする際に、より日本的な方法を採るべきであると考える一つの論拠と見なすことができると考えるからである。

５．研究の方法

先ず、過去の改訂も含めた小学校歌唱共通教材のすべての曲の音階を、単純に使用音だけから特定する方法だけでなく、柴田南雄の音階分析法、つまり音階の使用音の頻度数（曲全体で使われる回数）と総音価数（その使用音の全曲にわたる音価の合計）から頻度数や総音価数の高い有力な使用音を割り出し、通常の音階の中に潜むもう１つの音階を割り出す方法を使い、一般の音階の認識より詳細な音階情報で特定する。その上で、五音音階（ペンタトニック）から長・短音階へと進む座標軸、つまり音階構成音数が５音→６音→７音へと進む座標軸の上に各改訂ごとに整理する。各音階の座標細部の順番は音階使用音の劣位と優位の数字を検討し、適当な場所を決めるのである。

すでに木暮(2009)で現行小学校歌唱共通教材 24 曲は分析済である。これと同じ分析法により現行曲にない上掲した８曲の分析をこれに加える。その分析は次章である。

６．現行小学校歌唱共通教材にない過去の改訂による歌唱共通教材曲の音階分析

６－１．分析の方法

分析にあたっては，小泉文夫のテトラコード論とその上に立つ柴田南雄の理論を中心に、東川清一の「混合類」に代表される理論も可能な限り織り込みながら、雅楽や俗楽などの旧来の日本の音階の呼称やよく使われている一般的な名称も使って、個別の曲の分析をしていくこととする。その上で個別の曲を日本音階（日本システム）と長音階（西洋システム）へと連続的に進む座標の上に整理・位置づけして図示していきたいと考える。

なお、「音階」と「旋法」に関しては、本論ではすべて「音階」の用語を用いる。

また、使用する旧来の日本の音階名と小泉文夫及び東川清一の呼称等を以下のようにグループわけしておくことにする。

①陽音階グループ，構成音　ド－♭ミ－ファ－ソ－♭シ－（ド）

「陽音階」「呂音階」→ 俗楽と雅楽の呼称，「民謡音階」「律音階」→ 小泉文夫の呼称　「陽類」→東川清一の呼称，「四七抜き音階[5)]」→一般的呼称（「四七抜き長音階」とも）

②陰音階グループ，構成音　ド－♭レ－ファ－ソ－♭ラ－（ド）

「陰音階」→ 俗楽　（ただし、上例は下行形、上行形は♭ラが♭シになるのが一般的[6)]）

「都節音階」→小泉文夫の呼称，「陰類」→東川清一の呼称，

「四七抜き短音階[7]」→一般的な呼称

③琉球音階グループ，構成音　ドーミーファーソーシー（ド）

「琉球音階」→沖縄音楽（「沖縄音階」とも），小泉文夫もこの呼称，

「琉球類」→東川清一の呼称

④混合音階グループ，構成音　ドー（☆）－ファーソー（☆）－（ド）

☆は前後の音の間のどれかの音が入る。小泉文夫の４つのテトラコードが混合した音階が想定される。

「混合類[8]」→東川清一の呼称

※上の①～④の４つの音階グループはすべての移調形を含む。

◎柴田南雄の領域説では、核音から長２度程度内の領域に隣接音がある状態として、この４つのグループを包括して把握していると認識できる。

○他に、日本音階の呼称としては、「二六（ニロ）抜き短音階（陽音階に同じ）[9]」、「二六（ニロ）抜き長音階（琉球音階に同じ）」、「呂陰音階（四七抜き短音階に同じ）」等があるが、特殊な呼称であると考えられ、ここではグループに加えていない。

以上の認識は現行小学校歌唱共通教材を分析した木暮(2009)と同様である。

６－２．分析表の概説

分析には以下のような表と付帯する用語を用いる。

調性→　　（　　）

使用音						
頻度数						
総音価						
優先順						

音階→　　（　　）

①調性は西洋のシステムの一般的な呼名を記す。（　　）内は終止音と終止のしかたを記す。

②使用音は♯と♭を使った伊語カタカナ（固定ド読み）表記とする。左→右へ音高が順に高くなる。

③頻度数は曲全体の該当使用音の頻度回数。

④総音価は曲全体の該当使用音の音の長さの合計。ここでは四分音符を「１」と換算する。

⑤優先順は使用音の有力性を順位で示す。頻度数+総音価の数値の多いものを有力とする。

⑥音階は主に日本のシステムからの呼名。（　）内は核音終止か隣接音終止かを記す。

尚、この８曲の楽譜は注[10]にまとめて記載している。

６－３．分析結果

１）つき（１年Ｓ33-43改訂）

・四七抜き音階又は陽音階

調性→ヘ長調（主音の完全終止）

使用音	ファ	ソ	ラ	ド	レ			
頻度数	3	4	9	9	4			
総音価	2.5	3.5	7	6.75	1.25			
優先順	4	3	1	2	5			

音階→四七抜き音階・陽音階（核音終止）

２）ゆき（２年Ｓ33-43改訂）ヘ長調

・七抜き音階。七抜き音階だが四（♭シ）も劣位で、四七抜き音階（陽音階）に近い。

調性→ヘ長調（主音の完全終止）

使用音	ファ	ソ	ラ	♭シ	ド	レ		
頻度数	6	6	18	5	11	5		
総音価	3.5	3.25	11.5	1.25	7.5	2		
優先順	3	4	1	6	2	5		

音階→七抜き音階だが四七抜き音階（陽音階）に近い。（核音終止）

３）汽車（３年Ｓ33改訂）ト長調

・長音階。長音階だが四（ド）と七（♯ファ）が劣位で、四七抜き音階（陽音階）に近い。

調性→ト長調（主音の完全終止）

使用音	レ	ミ	♯ファ	ソ	ラ	シ	ド	レ
頻度数	6	4	1	12	8	15	2	5
総音価	3.5	2	0.5	8	6	7	0.5	2.5
優先順	4	6	8	2	3	1	7	5

音階→長音階だが四七抜き音階（陽音階）に近い。（核音終止）

４）村まつり（３年Ｓ43改訂）ト長調

・長音階だが四（ド）と七（♯ファ）が劣位であり、

四七抜き音階（陽音階）にやや近い。

調性→ト長調（主音の完全終止）

使用音	レ	ミ	#ファ	ソ	ラ	シ	ド	レ	ミ
頻度数	4	1	1	14	9	9	3	12	2
総音価	2.25	0.25	0.5	6.75	5.25	4	1.5	6.5	1
優先順	5	9	8	1	3	4	6	2	7

音階→長音階だが四七抜き音階（陽音階）にやや近い。（核音終止）

※ミはオクターブを含めると頻度数は 3 、総音価数は 1.25 となり、ドに近い数となる。
それでも、ミはドより少し劣位ではあり、明確に四七抜き音階（陽音階）が表れないので、ここでは「やや」という表現にしている。

5 ）村のかじや（ 4 年 S 33-43 改訂）ヘ長調

・四抜き音階。四抜き音階だが、六（レ）が一番劣位であり、四六抜き音階に近い。
その次に七（ミ）が劣位であり、四七抜き音階（陽音階）にもやや近い。

調性→ヘ長調（主音の完全終止）

使用音	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	ド	
頻度数	2	1	3	14	13	21	11	
総音価	1	0.5	1.25	6	6	9.75	5.5	
優先順	6	7	5	2	3	1	4	

音階→四抜き音階だが四六抜き音階次いで四七抜き音階（陽音階）に近い。（核音終止）

※ドはオクターブを含むと頻度数は 12 、総音価数は 6.5 となり、上位 3 音に並ぶ優位となる。
明確に四七抜き音階（陽音階）が表れないので、ここでも「やや」という表現にしている。

6 ）海（ 5 年 S 33-43 改訂）ヘ長調

・長音階。長音階だが、四（♭シ）と七（ミ）が劣位で四七抜き音階（陽音階）に近い。

調性→ヘ長調（主音の完全終止）

使用音	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	♭シ	ド	レ
頻度数	1	2	3	9	11	19	4	13	4
総音価	1	2	2.5	9.5	9	15.5	2.5	12.5	4.5
優先順	9	8	7	4	3	1	6	2	5

音階→長音階だが四七抜き音階（陽音階）に近い。（核音終止）

※このままでも自然に上位 5 音を取ると四七抜き音階（陽音階）が表れるが、ドとレのオクターブを含めると四（♭シ）と七（ミ）からの優位は増す。

7 ）かりがわたる（ 6 年 S 52 改訂）ト長調

・七抜き音階。七抜き音階だが四（ド）が劣位であり、四七抜き音階（陽音階）に近い。

調性→ト長調（主音の完全終止）

使用音	レ	ミ	ソ	ラ	シ	ド	レ	ミ
頻度数	2	1	7	12	13	5	10	7
総音価	4	1	12	14	16	5	14	8
優先順	7	8	4	2	1	6	3	5

音階→七抜き音階だが四七抜き音階（陽音階）に近い。（核音終止）

※オクターブを勘案せずに、このままでも上位 5 音は四七抜き音階（陽音階）であり、レとミのオクターブを考慮すると、レは最上位となり、ミはドからの優位を増す。

8 ）赤とんぼ（ 4 年 S 33 改訂）変ホ長調

・四七抜き音階

調性→変ホ長調（主音の完全終止）

使用音	♭シ	♭ミ	ファ	ソ	♭シ	ド	♭ミ	
頻度数	1	7	3	6	6	6	2	
総音価	0.5	6.5	2	4.5	4.5	3	1	
優先順	7	1	5	2	2	4	6	

音階→四七抜き音階・陽音階（隣接音終止）

ここまでで、木暮(2009)[11]で既に分析を行った現行曲 24 曲とこの 8 曲で過去も含めた 32 曲のすべての基礎データが揃ったわけである。日本的→西洋的の指標による図表化は次章のそれぞれの改訂の中で行うことにする。

7．各改訂の図表化

以下の表１～４に、４つの改訂を日本的→西洋的の座標を使って図表化して提示する。

７－１　昭和33年改訂（表１）

日本的←　　→西洋的

	５音			６音			７音				
	陰音階	陽音階	四七抜き音階	二四抜き音階	四抜き音階（七が劣位）	七抜き音階（四が劣位）	四抜き音階（七が劣位傾向）	七抜き音階（四が劣位でない）	長音階（七が劣位）	長音階（四七が劣位）	長音階（四七が劣位傾向）	短音階
一学年												
一年			つき・日のまる			かたつむり						
二年			さくらさくら			春がきた・ゆき						
三年					春の小川					もみじ・汽車		
四年			子もり歌	赤とんぼ			村のかじや					
五年								こいのぼり		海	冬げしき	
六年							おぼろ月夜			ふるさと	われは海の子	

７－２　昭和43年改訂（表２）

日本的←　　→西洋的

	５音			６音			７音				
	陰音階	陽音階	四七抜き音階	二四抜き音階	四抜き音階（七が劣位）	七抜き音階（四が劣位）	四抜き音階（七が劣位傾向）	七抜き音階（四が劣位でない）	長音階（七が劣位）	長音階（四七が劣位）	長音階（四七が劣位傾向）	短音階
一学年												
一年			つき・日のまる			かたつむり						
二年		さくらさくら				春がきた・ゆき						
三年					春の小川						村まつり もみじ	
四年			子もり歌・茶つみ				村のかじや					
五年								こいのぼり			冬げしき 海	
六年						おぼろ月夜				ふるさと	われは海の子	

７－３　昭和52年改訂（表３）

日本的←　　→西洋的

	５音			６音			７音				
	陰音階	陽音階	四七抜き音階	二四抜き音階	四抜き音階（七が劣位）	七抜き音階（四が劣位）	四抜き音階（七が劣位傾向）	七抜き音階（四が劣位でない）	長音階（七が劣位）	長音階（四七が劣位）	長音階（四七が劣位傾向）	短音階
一学年												
一年		ひらいたひらいた	うみ・日のまる									
二年		かくれんぼ	夕やけこやけ			春がきた						
三年	うさぎ				春の小川					ふじ山		
四年	さくらさくら			とんび						もみじ		
五年	子もり歌（陰）	子もり歌（陽）									スキーの歌・冬げしき	
六年						おぼろ月夜・かりがわたる				ふるさと		

７－４　平成元年改訂から現在　（表４）

日本的←　　→西洋的

	５音			６音			７音				
	陰音階	陽音階	四七抜き音階	二四抜き音階	四抜き音階（七が劣位）	七抜き音階（四が劣位）	四抜き音階（七が劣位傾向）	七抜き音階（四が劣位でない）	長音階（七が劣位）	長音階（四七が劣位）	長音階（四七が劣位傾向）	短音階
一学年												
一年		ひらいたひらいた	うみ・日のまる			かたつむり						
二年		かくれんぼ	夕やけこやけ	虫のこえ		春がきた						
三年		茶つみ うさぎ			春の小川					ふじ山		
四年	さくらさくら		とんび							まきばの朝・もみじ		
五年	子もり歌（陰）	子もり歌（陽）						こいのぼり			スキーの歌・冬げしき	
六年		越天楽今様			おぼろ月夜					ふるさと	われは海の子	

8．改訂による変更の特徴

4つの改訂は3度の変更の機会を生んだが、以下の節の見出しのような3つの変更と捉える。各節の見出しの後に、その変更の特質を＜＞内に示した。

8－1　昭和33→昭和43への変更
〈ほとんど同位置〉

ここでは2件の入れ替わりがあった。3年の「汽車」→「村まつり」と4年の「赤とんぼ」→「茶つみ」である。3年の「汽車」→「村まつり」は、双方とも長音階である。「汽車」は四七が劣位、「村まつり」は四七が劣位傾向である。したがって、＜少し西洋的な方向へ＞と考えられる。4年の「赤とんぼ」→「茶つみ」は、双方とも使用音は5音で陽音階もしくは四七抜き音階と考えられる。「茶つみ」は最後の音進行以外は核音同士か隣接音を通っての音進行であり、終止も核音の終止であり、四七抜き音階より陽音階に大変近いと考えられるので陽音階とした。「赤とんぼ」は領域を越えた隣接音同士の進行など、「音進行が核音同士か隣接音を通って核音に至る」という領域説にうたわれた日本の音楽の原則からはずれる音進行が多く、終止も隣接音となるので、陽音階ではなく四七抜き音階とした。したがって、この変更は＜少し日本的な方向へ＞と考えられる。

この2つの動きを見ると、その動きは相殺されて、昭和33→昭和43の変更は＜ほとんど同位置＞にあると考えられる。

8－2　昭和43→昭和52への変更
〈大きく日本的な方向へ〉

はじめに、学年移動は「さくらさくら（2年→4年へ）」「もみじ（3年→4年へ）」「子もり歌（4年→5年へ）」の3曲だが、これは双方の改訂に共通しており、改訂の全体で変化を捉えるため、以下の学年ごとの分析からは除外して考えることにする。

1年での変更は「かたつむり」と「月」→「うみ」と「ひらいたひらいた」である。

「月」→「うみ」は双方とも四七抜き音階であり、平行状態で動きはない。「かたつむり」→「ひらいたひらいた」は「かたつむり」が七抜き音階で四が劣位、「ひらいたひらいた」は陽音階であるので、＜日本的な方向へ＞と考えられる。

2年の変更は学年移動の「さくらさくら」をのぞくと、「雪」→「夕やけこやけ」と「かくれんぼ」である。「雪」は七抜き音階で四が劣位、「夕やけこやけ」と「かくれんぼ」は四七抜き音階と陽音階であり、＜やや大きく日本的な方向へ＞動いたと考えられる。

3年の変更は学年移動の「もみじ」をのぞくと「村まつり」→「うさぎ」と「ふじ山」である。「村まつり」は長音階で四七が劣位傾向でかなり西洋的であるが、「ふじ山」は長音階で四七が劣位であり、ほんの少し日本的方向へ動き、「うさぎ」の陰音階で大きく日本的な方向へ動いたので、ここでも＜やや大きく日本的な方向へ＞動いたと考えられる。

4年の変更は「村のかじや」と「茶つみ」→「とんび」である。「村のかじや」は四抜き音階で七が劣位傾向であり、「茶つみ」が陽音階であるので、「とんび」の四七抜き音階の位置より＜少し日本的な方向へ＞動いたと考えられる。

5年の変更は「こいのぼり」と「海」→「スキーの歌」である。「こいのぼり」は七抜き音階で四が劣位ではなく、「海」は長音階だが四七が劣位である。「スキーの歌」は長音階の四七が劣位傾向であり、＜少し西洋的な方向へ＞動いたと考えられる。

6年の変更は「われは海の子」→「かりがわたる」である。「われは海の子」は長音階だが四七が劣位であり、「かりがわたる」が七抜き音階の四が劣位であるので、＜日本的方向へ＞動いたと考えられる。

したがって、この変更を総括すると、昭和43→昭和52への変更は＜大きく日本的な方向へ＞動いたと考えられる。

8－3　昭和52→平成元（現行）への変更
〈日本的な方向へ〉

この変更から新規又は復活で6曲増えて全体が24

曲になる。教科書ではそこから18曲選ばれる形となる。

1年の「かたつむり」は復活付加で七抜き音階で四が劣位であるから、＜少し西洋的な方向へ＞と考えられる。

2年の「虫のこえ」は新規付加で、二四抜き音階で七が劣位であり＜ほとんど同位置＞と考えられる。

3年の「茶つみ」は復活付加で、陽音階であるので＜日本的な方向へ＞と判断する。

4年の「まきばの朝」も新規付加で、長音階で四七が劣位であり、＜西洋的な方向へ＞と判断できる。

5年の「こいのぼり」は復活付加であるが、七抜き音階で四が劣位ではない位置なので、＜ほとんど同位置＞ と判断する。

6年の「越天楽今様」は新規付加の陽音階であり、単独では大きく日本的方向へと判断できる。「かりがわたる」→「われは海の子」の変更はやや西洋的な方向へ動いたと判断できるので、この学年全体としては＜日本的な方向へ＞と判断する。

したがって、この変更を総括すると、陽音階2曲の付加は重い大きな動きであり、それを考慮すると、昭和52→平成元（現行）への変更は「やや」ではなく＜日本的な方向へ＞動いたと判断する。

9．まとめと今後の課題

以上のように、柴田南雄の音階分析法を使った歌唱共通共通教材曲の「西洋的〜日本的」を座標とした音階分類表（表1〜4）を分析すると、4つの改訂による3つの変化は、1回目（昭和33→昭和43への変更）は＜ほとんど同位置＞で動かず、2回目（昭和43→昭和52への変更）は＜大きく日本的方向へ＞動き、3回目（昭和52→平成元〜現行への変更）でも＜日本的な方向へ＞動いたと分析できるのである。

すでに木暮(2009)では、すべての現行小学校歌唱共通教材曲は、日本音階と西洋音階の折衷であり、純粋な長音階や短音階ではないと結論している。それは日本音階の影響を受けている点で日本的・伝統的であるわけだが、時系列としては、日本的・伝統的な方向へ動いてきた結果として現行曲があると位置づけられるのである。それは、改訂による変化の中で、日本音階の影響の濃いものが多くなってきたということでもある。

今回は柴田南雄の音階分析の観点に光を当てて日本音階の観点から課題に迫った。今後は先行研究にも挙げた五音音階の旋律に対する占有度の観点からも小学校歌唱共通教材曲を分析し、今回のようにそこに時系列の変化も付け加えて、さらに、これらの曲がどれほど日本的・伝統的であるのかの論拠を明らかにして行こうと考える。その上で、これらの観点を合わせて、小学校歌唱共通教材曲が＜日本的→西洋的＞という座標上をどう動いて来たのかを総括したいと考える。

注

1）現行の平成20年の改訂の曲目は平成10年及び平成元年の改訂と同一曲目である。
曲目は表4に明らかであり、全24曲から各学年3曲計18曲が選択される。

2）昭和52年の改訂は18曲であり、曲目は表3に明らかである。

3）昭和43年の改訂も18曲であり、曲目は表2に明らかである。

4）昭和33年の改訂も18曲であり、曲目は表1に明らかである。

5）ドレミファソラシを一二三四五六七（ヒフミヨイムナ）に対応させている。つまりファとシのない長音階をさす。「ヨナ抜き音階」とカタカナで表記することもある。

6）上行形は小泉文夫のテトラコード論で考えると都節テトラコードの上に民謡テトラコードがディスジャンクトで接合した形である。

7）ヨナ抜き音階のレ→♭レ，ラ→♭ラになった形。ド－♭レ－ミ－ソ－♭ラの構成音となる。このグループの構成音のファがミになっている。小泉文夫の都節音階や都節テトラコードの核音にずれがある形である。洋楽の影響が強いと考えられる。

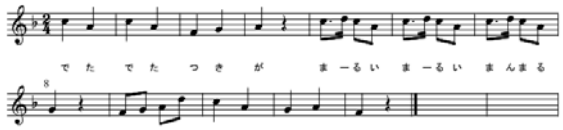
8）東川清一の「混合類」は小泉文夫のテトラコード

論に置き換えると律のテトラコードの上に都節テトラコードをディスジャンクトした形だけであるが、ここの「混合音階グループ」はその他の組み合わせも含む形を想定している。

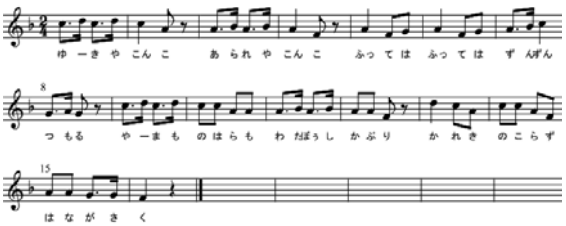
9）この場合の「二六」を「ニロ」と呼ぶのは、四七抜き音階のように「ヒフミヨイムナ」ではなく、漢数字の普通の読み方の始めの音を採用していると考えられる。

10）現行歌唱共通教材曲にない8曲の楽譜を以下に示す。

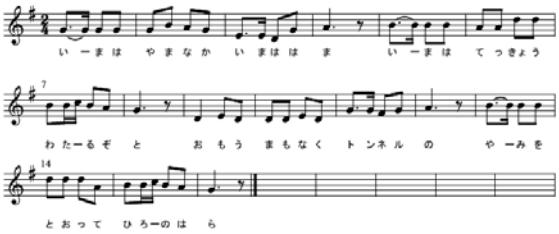
つき



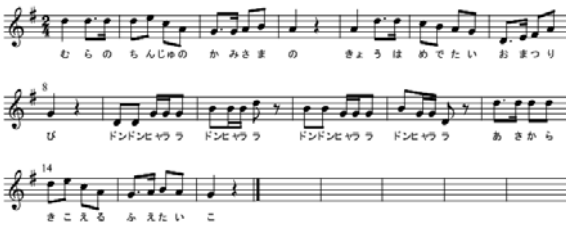
ゆき



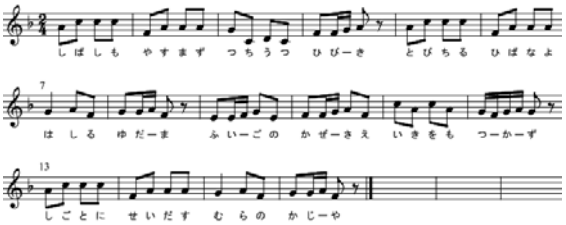
汽車



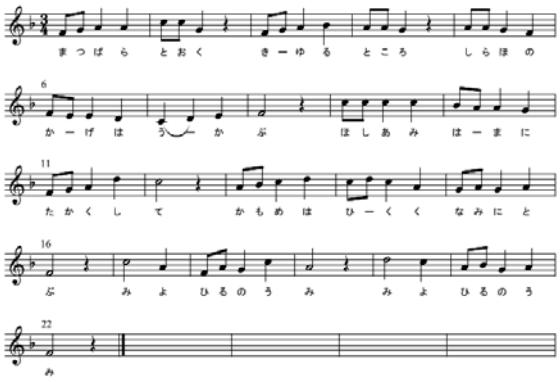
村まつり



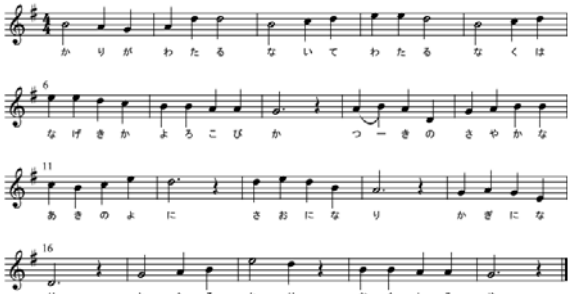
村のかじや



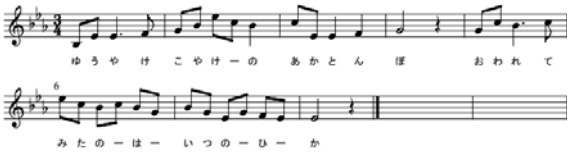
海



かりがわたる



赤とんぼ



：出典「つき、ゆき、汽車、村まつり、村のかじや、海、赤とんぼ」の7曲は、足羽　晃編「日本童謡唱歌全集」ドレミ楽譜出版社,1985,を参照して、「かりがわたる」は平岡均之「平岡均之作

曲集」私家版,1969,を参照して、旋律のみを楽譜ソフト「スコアーメーカー」にて作成し、ここに掲載した。

11）現行曲 24 曲の分析結果は本文の表 4 に明らかである。

引用・参考文献

木暮朋佳「小学校歌唱共通教材の日本音階に関する一考察～柴田南雄の分析法を中心に用いて～」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』第 54 号,2009,pp.47-53

木暮朋佳「小学校歌唱共通教材の歌詞の定型詩構造に関する一考察」『美作大学・美作大学短期大学部紀要』第 56 号, 2011,pp.65-72

－上掲論文採録　木暮朋佳(平成 24 年分)『日本語学論説資料』第 49 号,第四分冊（文章・文体・音声・音韻), 論説資料保存会, 2015,pp.270-274

木暮朋佳「歌詞の定型詩構造を観点とした小学校共通教材の変遷－日本的・西洋的を指標として－」,『音楽教育史研究』第 16 号, 音楽教育史学会, 2014,pp.13-24

柴田南雄「音楽の骸骨のはなし」音楽之友社, 1978,pp.28-44

足羽　晃編「日本童謡唱歌全集」ドレミ楽譜出版社, 1985,